

主 題：誠実な者の歩み

聖書箇所：詩篇26篇

テーマ：不当な扱い/いわれのない非難を受けるような苦しみの中で、あなたは誠実に歩み続けられますか？

今年度、最後のメッセージとなりました。やはり最後を締めくくるのはこれしかないということで、今朝皆さんとともに見たいみことばは、詩篇のみことばです。詩篇26篇、聖書をお持ちの方はどうぞお聞きください。振り返ってみると、この一年も、さまざまなことを詩篇を通して学ぶことができました。どうでしたか？私自身、ダビデの残したことばから数多くのことを学ばされ考えさせられました。試練や苦難の中に置かれるときに、どのようにして主に変わらずに祈りをささげることができるのか？愛する主を礼拝する者としてふさわしい態度はどんなものなのか？忠実に歩み続けるために何にいつも心を留めるべきなのか？またキリストの十字架での苦しみの姿や、主が羊飼いであること、主が栄光の王であること…私たちはますます主を深く知るだけでなく、日々の信仰の歩みにおいて必要な知恵や助けや励まし、そのようなものを詩篇を通してくり返し見ることができました。改めて思いませんか？この聖書は何千年も前に書かれた単なることばではなくて、今も変わらずに私たちのうちに生きて働く力ある神様のことばだと。きょう私たちが見るこの詩篇26篇も、ひとりひとりがよく考えるべき大切な真理を教えてください。では、神様が一体何をここで教えてくださっているのかを一緒に見ていきたいと思います。まず、いつものようにみことばをお読みしますので、1節から見てください。

詩篇26篇 ダビデによる

「:1 私を弁護してください。【主】よ。私が誠実に歩み、よろめくことなく、【主】に信頼したことを。:2 【主】よ。私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためしてください。:3 あなたの恵みが私の目の前にあり、私はあなたの真理のうちを歩み続けました。:4 私は、不忠実な人とともにすわらず、偽善者とともに行きません。:5 私は、悪を行う者の集まりを憎み、悪者とともにすわりません。:6 【主】よ。私は手を洗ってきよくし、あなたの祭壇の回りを歩きましょう。:7 感謝の声を聞こえさせ、あなたの奇しいみわざを余すことなく、語り上げましょう。:8 【主】よ。私は、あなたのおられる家と、あなたの栄光の住まう所を愛します。:9 どうか私のたましいを罪人とともに、また、私のいのちを血を流す人々とともに、取り集めないでください。:10 彼らの両手には放らつががあり、彼らの右の手はわいろで満ちています。:11 しかし、私は、誠実に歩みます。どうか私を贖い出し、私をあわれんでください。:12 私の足は平らな所に立っています。私は、数々の集まりの中で、【主】をほめたたえましょう。」

さて、これから私たちは内容を詳しく見ていきますが、その前に、この詩篇の背景を少し押さえておきたいと思います。表題にもあったように、この詩篇を記した著者はダビデでした。そしてそのダビデは、いつもと同じように、ここでもまた苦しみの中に置かれていたのです。どんな苦しみだったか、具体的にどのようなものなのか、歴史上の背景というものはよくわかってはいません。しかし、今回彼が経験していたことというのは、周りを取り囲む敵からのいわれのない非難でした。彼は何の間違いも過ちも犯していないにも関わらず、ありもしないことで責め立てられ、人々から不当な扱いを受けていたのです。周りには、彼の声に耳を傾けてくれるような人も、彼のことをかばってくれるような人もいませんでした。自分自身の無実を訴えようにも、彼のうちにはそのような力などなく、自分の身を守る術などなかったダビデは苦難の中に置かれていたのです。

おそらく、皆さんもこれまでにそのような経験をされたことがあるのではないかと思います。だれから、あなたがしていないことをあたかもしたかのように扱われて、理不尽に非難されたりするので

す。たとえば、家族や友人や兄弟姉妹との間にあって、ありもしないことで疑われ、誤解が生じ、冷たく扱われることがあるかもしれません。職場や学校などで、間違っただけの噂を影で流されて、その結果、自分を見る目が冷たく感じられることがあるかもしれません。あの人も自分を悪く言っているんじゃないかという恐れや不安、心の動揺を覚えたことがあるかもしれません。また何より、信仰者として忠実に生きていこうとすれば、ほかの人にはその生き方が全く理解できず、自分の信仰をおもしろおかしく扱われたり、変わった人として見られて拒絶されることがあるかもしれません。どうにかして自分の立場や自分の正しさを証明しようとしても、だれも自分に耳を傾けてくれない、本来責められる必要もないことで責められているのに、自分は無力でどうすることもできない…もしかしたら、そのような困難を今まさに経験している方がおられるかもしれません。自分は何も間違っただけをしていないのにどうしてこんなひどい目に合わないといけないのだろう…こんな疑問や葛藤を心に覚えている方もおられるかもしれません。

では、自分にはどうすることもできないし周りにも助けを見出すことなどできない、というような状況に陥ったなら、はたして私たちはどのようにその中でふるまおうとするのでしょうか？そのような状況に私たちはどう応答しようとするのでしょうか？周りで起きている理不尽さや不公平さに心がかき乱され、悲しみや恐れによって心が支配されてしまわないのでしょうか？

ある人は思うかもしれません。自分は神様に信頼して歩んでいるのに、どうしてこんな状況に陥っているのだろう？なぜこの問題を神様はすぐに改善してくださらないのだろう？結局、神様に信頼して歩んでいても何もならないんじゃないか…こうして自分の手に負えない問題が降りかかってきて、それが解決せずに長引けば長引くほど、何もしてくださらない神様に怒りや不満や失意、そのようなものを覚えて、主の前を忠実に歩み続けることを諦めてしまうかもしれません。このことを私たちよく知っています。何の困難もなく色々な事がうまくいっているときは主の前を誠実に歩むことが比較的容易にできたとしても、心を悩ませる問題が生じるときにはそれを難しく思ってしまう、そんな弱さを私たちは持っているのです。そのような葛藤や難しさをこれまでに経験したことはないのでしょうか？もし今、そのような苦しみを味わっていたり、もしくは、これから先に出くわすことがあれば、きょう見るこの詩篇26篇を思い出してください。

初めにも述べたように、この詩篇を記したダビデは、いわれのない敵の不当な扱いや非難を受けて苦しんでいました。彼は、周りのだれにも助けを見出すことができませんでした。しかし、そんな困難の中であって、ダビデは神様に身をゆだね、そして祈りをささげるのです。彼はほかの人が理解してくれなかったとしても、自分の歩みをご覧になって心の内をすべて知っておられる神様が自分のことを守り助けくださる、と希望を置いていたのです。そしてそのような希望を持っていたからこそ、ダビデは変わることなく、ある歩みをしていました。どんな歩みでしょう？

26篇を見ていただくと、1節のところに「私を弁護してください。【主】よ。私が誠実に歩み、…」ということばがあります。3節の後半部分に「私はあなたの真理のうちに歩み続けました。」ということばがあり、そして11節には「しかし、私は、誠実に歩みます。」ということばがあります。「私は、誠実に歩み、」「真理のうちに歩み続けました」「誠実に歩みます」とくり返されていました。ダビデは自分の手に負えない困難の中にあろうとも、変わらずに誠実な歩みをする者として生きていたのです。では皆さん、一体どうして、ダビデはこのような歩みを変わずにすることができたのでしょうか？もっと言えば、具体的にどのようにして彼は難しさの中で、その難しさと向き合っていたのでしょうか？きょうは誠実に歩み続けたダビデの姿から三つのふるまいを学んでみたいと思います。このみことばが皆さんの励ましと慰めになることを祈っています。

○誠実な者の歩み：ダビデの三つのふるまい

1. 主の守りを祈り求めること 1－3節

さて、最初のダビデのふるまいを私たちは1-3節で見取ることができます。一つ目のふるまいは、「主の守りを祈り求めること」でした。1節は、ダビデの神様に対するこのようなことばで始まっています。「私を弁護してください。【主】よ。私が誠実に歩み、よろめくことなく、【主】に信頼したことを。」と。不当な扱いを受けて苦しんでいたダビデが始めにしたことは、神様に「私を弁護してください。」と訴えることでした。彼は、神様が人には見えないことをすべてご覧になっておられるお方であり、必ず正しい判断を下してくださる審判者であることをわかっていたのです。だからこそ、その方に向かって言いました。「【主】よ」と。「今、私の周りには敵がいて、ありもしないことで私を責め立てています。私は無力で何もできません。でも、あなたは、私がいつも誠実に歩み、変わらずあなたに信頼したことをご存じです。私が無実であることを、あなたは知っておられます。だから今の状況から私を助けて私の無実を証明してください。私を弁護してください。」と。ここでダビデは1節の中ほどで「私が誠実に歩み、」と口にしていたのですが、もちろんこれは、彼自身が一切罪のない完璧な人間だということを主張していたのではありません。彼はここで、自分はすべての点において完全に正しいということ誇っていたわけではなかったのです。ここで「誠実に」と訳されていることばには、「非難されるところのない」とか「潔白な、偽りのない」という意味があります。つまり彼は、自分には全く罪がない、ということを行わんとしたのではなくて、彼を告発する者たちの訴えが間違っていて、自分は非難される覚えがないのだ、ということを書いていたのです。ダビデは自分自身が主の前を誠実に歩んでいたこと、どんなときも揺るがされることなく主に信頼してきたということ信じていました。だからこそ、今、敵からとがめられているその罪には自分は絶対に当てはまらない、自分は無実だ、とそう確信していたのです。

しかし同時に、自分の弱さをわかっていたダビデはそれで終わってはいませんでした。彼は自分自身の歩みをふり返ったときに、そこには問題がないと自分では思っていました。でももしかしたら、自分には気づいていない部分があるかもしれないということに気づいていたので、彼は続く2節でこのように願うのです。「【主】よ。私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためてください。」ここで「私の思いと私の心」とあります。言い換えると、これらはダビデ自身の内側の部分、彼の良心や感情、意志や動機…そういったものを指しています。ダビデの内側の部分のことです。要するに、ダビデはここで主に向かって、「外側のふるまいだけでなく、自分の思いと心…自分の内側にある感情や動機、心の内にあるすべてのものを調べてください。」とそのように神様に求めているのです。これを聞いてどう思います？すごく大胆な祈りだと思いませんか？自分のこととしてちょっと考えてみてください。言えます？こんなふうに神様に対して。「私の外側だけを見ないでください、内側にあるものをご覧になってください、人前で私がどのようにふるまっているのかだけでなく、ひとりの時に心の内で何を考えていて何を思っているのか、そのことを主よ、あなたが調べてください」と言っているのです。

また忘れていけないのは、ダビデはこの訴えを、苦しみの中に置かれていたときにしていたということです。自分の手に負えないような状況の中であって、容易に不安や悲しみというものを覚えても仕方がないそのようなときに、彼は、主が自分のうちを探ってくださいようにと願っていました。もう一度言いますが、ダビデは自分の主がどのようなお方であるのかをよくわかっていたのです。彼は主が心の内のすべてをご覧になって、正しい判断を下されるお方であると覚えていたのです。そしてその方に向かって、自分には見えない部分さえもご存じの方に自分の身をゆだねるのです。19世紀の聖書の註解者、ジョン・ペローンという人物も、この箇所についてこのようなことばを残しています。「ダビデは何も包み隠さないことを望んでいます。彼は偉大な“精錬者”の炎に身を委ね、全ての自己欺瞞の不純物を取り除こうとするのです。」と。この姿を見てどう思います？不思議に思いませんか？一体どうして

ダビデはこんなふうに大胆に神様の前に、自分のうちを調べてくださいと願うことができたのでしょうか？一体どこからこの大胆さというものは湧いてきたのでしょうか？

▶「(なぜなら) あなたの恵みが私の目の前にあり、私はあなたの真理のうちに歩み続けました。」 3節

その答えが3節に続いていました。「あなたの恵みが私の目の前にあり、私はあなたの真理のうちに歩み続けました。」と。残念ながら日本語の聖書には訳されていないのですが、実を言うと、この3節の一番初めは「なぜなら」という接続詞で始まっているのです。ですから、ダビデがここで言わんとしたことはこういうことです。「主よ。私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためしてください。なぜなら、あなたの恵みが私の目の前にあり、私はあなたの真理のうちに歩み続けました。」なぜなら、あなたの恵みが私の目の前にあり…つまり神様に対して私を調べてくださいと大胆に求めることができたのは、彼自身のうちに何か根拠があったからではなく、ただ主の恵みが彼の目の前にあったからでした。もっと言えば、ダビデは、自分に示された神様の恵み、いつまでも変わらない神様の愛やあわれみというものを覚え、いつもその神様の姿に心を留め続けていた、というのです。彼が覚え続けていたその主の恵みのゆえに、彼の誠実な歩みというものは可能になりました。また、皆さんと一緒に詩篇を学んでいく中で何度も見ましたが、ここで「恵み」と訳されていることばは、「神様がご自分の民と結ばれる契約に対するご自身の誠実さ」を表すのに用いられることばです。ご自身の誠実さです。決して途絶えることも尽きることもない神様の変わらない愛やあわれみというものを、このことばは表しているのです。ダビデは彼の置かれている状況に心が左右されるのではなく、主の決して変わることはない、決して尽きることもない主の誠実な愛を覚え続けていました。その神様の姿に信頼して歩み続けていたのです。

おそらく試練や苦しみに直面するときに、私たち自身が経験する一つの大きなチャレンジというのは、主のあわれみを信じ続けられるのか、それとも疑いを抱くのかだと思います。すべてを支配しておられる主を愛する者のためすべてを益にする、と約束してくださったその神様が、理不尽な扱いや不当な訴えさえ本当に私たちの益にされるのか、その約束を信じられるかが問われるのです。そしてもし、私たちが、神様の愛が私たちを取り囲む状況によって変化してしまったかのように感じ、あたかも失敗で終わってしまうかのように思えるときに、私たちが主の恵みの深さに確信を置くことができなければ、間違いなくその信仰は揺らいでしまうのです。主に信頼し続けていくということが難しく感じるようになるのです。しかし、ダビデは そうではありませんでした。彼は自分のうちや置かれた状況を見て、そこで神様の愛を図ろうとしませんでした。彼は、ご自分の民に対していつも誠実でいつも変わらなかつた神様の尽きることもない恵みを覚えて、その変わらないご性質に心を留めようとしたのです。そしてその恵みのゆえに、彼は誠実に歩み続けることができました。

考えてみれば、私たちは、人々に対するそのような神様の変わらない愛を、聖書の至るところでくり返し見ることができます。たとえば、ヨセフの姿を思い出してみれば、彼は自分の兄弟たちによって憎まれ、不当な扱いを受けて、エジプトの地へと奴隷として売られていきました。でもその後どうなったのでしょうか？そのような状況さえも恵みの神様は用いて、ヨセフやほかの人々にとって素晴らしいことを成し遂げられたのです。またイスラエルの歴史を振り返ってもイスラエルの民もそうでした。彼らは何度も何度も神様に対して不平不満をつぶやいて逆らっていました。自分たちの手で偶像を作り、偶像を礼拝することもありました。神様によって滅ぼされても仕方のないような罪深い存在だったのです。しかし恵みの神様は、彼らすべてを滅ぼすこともなく、変わらず愛や赦しを示されていました。主のあわれみ深い姿を覚えた詩篇の著者も、このようなことばを詩編136：1-3に残しています。「1

【主】に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。:2 神の神であられる方に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。:3 主の主であられる方に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」と。こうしてダビデは、自分の目の前に主の恵みを置いて、いつもそれに心を留めていました。良いときも悪いとき

も、主の変わらない愛を期待して信じて、その真理のうちに歩み続けていたのです。主の恵みは尽きることがないのだというその真理が彼を励まして、主の真理のうちに歩み続ける力を彼のうちに生み出していました。同じように私たちもこのことを覚えることができます。主の恵みは昔も今もそしてこの先も変わることはありません。私たちが誠実に歩み続けるための力も、ここにあるのです。不当な扱いを受けて苦しんでいたダビデがまず初めにしたこと、それは、主に対して私を弁護してくださいと訴えて、主の守りを祈り求めることでした。主の尽きることのない恵みを覚えて、主の前を誠実に歩んでいたからこそ、彼はそのような願いを主にささげることができました。そのように主のうちに助けを見出すことができたのです。私たちも同じように苦しみの中にあるとき、主の守りを祈り求めることができます。たとえ周りに助けがなかったとしても、私たちはまずダビデと同じように主の前に出て主の助けを求めることができるのです。

今ここで私たちは、ダビデが誠実な歩みを続けていたことを見ましたが、こう思っている方がいるかもしれません。…ダビデが誠実な歩みをしているということはわかりましたが、具体的に誠実な歩みとはどのような歩みのことを言うのでしょうか？よく私たちは誠実な歩みと言いますが、はたして、私たちはどのようにしてそれが誠実な歩みだと知ることができるのでしょうか？…もし、そのように考えている方がおられるなら、ダビデはその答えを続きの4－8節で教えてくれていたのです。誠実な歩み、誠実な生き方というものが実際にどのようなものを表しているのか、4節から見てください。「:4 私は、不真実な人とともにすわらず、偽善者とともに行きません。:5 私は悪を行う者の集まりを憎み、悪者とともにすわりません。:6 【主】よ。私は手を洗ってきよくし、あなたの祭壇の回りを歩きましょう。:7 感謝の声を聞こえさせ、あなたの奇しいみわざを余すことなく、語り上げましょう:8 【主】よ。私は、あなたのおられる家と、あなたの栄光の住まう所を愛します。」

2. 主の忌みきらわれるものを忌みきらい、愛するものを愛すること 4－8節

不当な扱いを受けて苦しんでいたダビデが最初にしたことは、まず主の守りを祈り求めて、自分を弁護してくださいと願うことでした。しかしこの箇所では、二つ目のふるまいを見ることができます。二つ目は、「神様が忌みきらうものを忌みきらい、愛するものを愛すること」でした。ここで覚えてほしいことは、ダビデは困難な状況に置かれることがあろうとも、神様の前を誠実に歩むことをやめようとはしなかった、ということです。周りの人や環境によって彼はその生き方をあきらめることはしませんでした。これは私たちにとっても、非常に大切なこととなります。なぜなら、私たちが苦しみに直面するときほど、神様の前を忠実に歩み続けるのかどうか問われるからです。歩み続けることをあきらめてしまう、こんな誘惑をそのようなときに私たちはよく覚えるからです。もしかすると、主のために色々なものを犠牲にしてみことばに従って私たちが歩もうとする中で、私たちはそれとは反対に、神様に逆らうような歩みをしている者たちを目の当たりにするかもしれません。そして、そのような者たちが何の問題もなく栄えているような様子を見れば、何で自分はこんなことをしているのだろうと思ひ悩むかもしれません。この世の楽しみを追い求めている者たちや、神様のことに耳を傾けようともせず歩んでいる者たちが、喜びや幸せを見出している姿を目にすれば、自分が忠実に歩むことが愚かに思ってしまうといった難しさに直面するかもしれません。そんな葛藤を味わっていく中で、急にすべてを否定することはなかったとしても、徐々に神様やみことばに従うことを妥協し始めて、心からの主への熱意や愛が薄れていくかもしれません。忠実に歩んだとしても何もならないじゃないか…と。

しかし、ダビデは、困難や葛藤が生じてきそうなその中であって、変わらずに誠実に歩もうとしていました。私たちは大きく二つのことをこの4－8節の中で見ることができます。ダビデの忌みきらうもの、そして愛するものを愛すること、この二つのことです。

●ダビデが忌みきらったもの 4－5節

まず4-5節のところに、ダビデが忌みきらっていたものが挙げられていました。もう一度4-5節を見ていただくと「:4 私は、不真実な人とともにすわらず、偽善者とともに行きません。:5 私は、悪を行う者の集まりを憎み、悪者とともにすわりません。」ダビデはここで、悪者の集まりを憎んでいました。神様に逆らう者たちと一緒にいることを、彼は忌みきらっていたのです。勘違いして欲しくないのは、ダビデがここで、悪を行う者が集まりを憎む、と口にしたとき、彼は自分が聖いから、それ以外の主に逆らう人を私は一切受け入れられません、私はそんな人を知りません、と拒絶していたのではないということです。彼は自分の正しさを誇りとして罪を犯している人々をさげすんでいたのではありませんでした。では何を言わんとしているのか？ダビデは、彼らの悪にあふれた生き方を忌みきらっていたということです。そのような悪い影響から自分自身が影響を受けないように、それから離れようとしていました。

「私は不真実な者と一緒にすわりません」「偽善者とともに行きません」「悪者とともにすわりません」これとよく似たことばを思い出しません？これこそまさに詩篇1篇に出てきた、幸いな人の生き方でもありました。詩篇1:1にこう書いていました。「幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座につかなかった、その人。」と。ダビデはこのようにして、自分が主の前を誠実に歩み続けていくために、それを妨げるような悪い影響から離れようとしていました。知恵深くそのような人たちを避けようとしたのです。これは私たちにとってもよく考えるべきことだと思いませんか？自分自身を振り返ってみれば、私たちはこの世の考え方や生き方というものに影響受けやすいという性質を持っています。私たちは気をつけていなければ、普段の生活の中で、神様やみことばのことよりも、この世のことを考えているかもしれません。この世のことについていつも心が囚われてしまっているかもしれません。私たちは、神様を知らない人たちの生き方や、この世にあふれているものが魅力的に見えてしまっていて、そのような誘惑に駆られることも少なからずあるのです。よく考えてみてください。私たちは普段の歩みの中であって、どれほど神様から称賛されることを追い求め、どれほど人から称賛されることを追い求めているのでしょうか？もっと言えば、私たちの周りにいる人たちから自分がどのように見られたいかを追い求めているのでしょうか？神様のみことばに従っていくことよりも周りの人の目を意識して、その人たちから良く思われること、評価を得ることに熱心になっていないのでしょうか？もしかしたら、私たちが福音を宣べ伝えることを躊躇するのは、仲の良い友人や職場の人たちから、それをしたら何か変なふうに思われるのが心配だからかもしれません。もしかしたら、神様の前に喜ばれないことに対して私たちがはつきりとノーと言えないのは、それをしたら周りの人たちから浮いて馴染めなくなってしまうからかもしれません。

ダビデはここで、未信者の友人や職場の人と時間をともにしてはいけない、という話をしていたわけではありません。しかし大切なポイントは、神様に逆らうこの世の生き方に私たち自身が影響受けるのではなくて、私たち自身が神様を愛する者として影響を与える者となることが大切だ、ということです。かつて、CSルイスもこのようなことばを残していました。皆さん、よくこのことばを考えてみてください。このように言っています。「多く人は、自分が好ましくないと思う人も含め、有名な人や『重要な人』に会いたいという気持ちをととても強く持っている。しかし、私は、クリスチャンは、横暴な人、好色な人、残酷な人、不誠実な人、意地の悪い人などとの出会いを、できる限り避ける方が賢明だと思われる。それは、私たちが彼らにとって『良すぎる』からではない。ある意味で、私たちは十分に優れていないからである。そのような社会で過ごす一夜が生み出すあらゆる誘惑に対処できるほど、私たちは優秀でもなければ、全ての問題に対処できるほど賢くもないからである。」その通りだと思いませんか？私たちはみなその弱さを持っているのです。誘惑に勝てると思っているその誘惑に、私たちは負けることがあります。だからこそ皆さん、ダビデがしたように、みずからその悪から離れる、ということが大切になるのです。

もしかしたら、このように心で考えたことがあるかもしれません。自分はどこまで誘惑に耐えられるだろうか。あたかも自分がそれを乗り越える力があるかのように色々なものをためそうとしたことがあるかもしれません。でも、知恵ある行為というのは、そのようなことを自問自答するのではなく、誘惑があれば、その場からすぐに立ち去ることが大切だということです。どうしてかというと、私たちには、その誘惑に打ち勝つことができる力がなかったりするからです。弱さを持っているからです。ですから、このように主の前を誠実に歩いていくということには、主の忌みきらわれることを忌みきらうということも含まれていました。

●ダビデが愛したもの 6－8節

▶「【主】よ 私は、あなたのおられる家と、あなたの栄光の住まう所を愛します。」 8節

〔新改訳2017：「【主】よ。私は愛します。あなたの住まいのある所 あなたの栄光のとどまる所を。」〕

しかしそれと同時に、誠実に歩むということには、主が愛されることを愛する、ということも含まれているのです。もう一度6－8節を見てください。「:6 【主】よ。私は手を洗ってきよくし、あなたの祭壇の回りを歩きましょう。:7 感謝の声を聞こえさせ、あなたの奇しいみわざを余すことなく、語り上げましょう:8 【主】よ。私は、あなたのおられる家と、あなたの栄光の住まう所を愛します。」注目して欲しいのは、特に8節です。ダビデはここで「あなたのおられる家と、あなたの栄光の住まう所を愛します。」と口にしていました。ダビデはどうして、この主の家というものを愛していたのでしょうか？もちろん一つには、それが主の臨在される所であるからでした。ここで用いられている「あなたのおられる所」の「おられる」ということばには、「隠れ家」や「避け所」といった意味があります。特に、詩篇の中を見るときに、主のおられる所が、そこに身を避ける者にとっての守りや、避け所になるということ、詩篇の著者はくり返し描いていました。たとえば、詩篇91：9に「それはあなたが私の避け所である【主】を、いと高き方を、あなたの住まいとしたからである。」と書かれています。主を愛していたダビデは、その主の守りが存在し、主の栄光がとどまる所であった主の家を同じように愛していたのです。そして、これは私たちがさっき考えたことをさらに理解するための助けを与えてくれます。考えてみてください。私たちは先ほど、ダビデは悪者の集まりを憎んでいたことを見ましたね。彼は自分に悪い影響与えかねない、そのような罪からできる限り離れようとしていました。でも彼は、自分を悪から遠ざけて終わりではありませんでした。彼は悪から離れて、その代わりにますます神様を愛そうとしたのです。言い換えれば、忌みきらうことにおいて成長していくということは、神様を愛することにおいて成長していくことにも繋がっている、ということです。私たちは単に神様の憎まれることを憎んで、はいそれで終わり、ではありません。私たちは、同時に、みことばを通して、神様ご自身について、神様が愛されることについて学んでいくのです。神様のあわれみや忍耐や聖さや正しさというものを学んで、私たちがこの方をますます愛する者になっていけば、私たちはおのずと悪を忌みきらうようになっていくのです。このようにして私たちは、はかないこの世の楽しみにふけることよりも、神様にある本当の喜びにいつも心を留める者へと変えられていくのです。また、もっと言えば、私たちが主を愛する者へと成長していけばいくほど、この世に対しても愛を示そうとする者へと変わっていくことになります。もちろんそれは、この世からの評価を得るためにそのようなになるのではありません。そうではなくて、まだ主を知らない人々に、自分たちが愛する神様のことを知ってほしいと願うようになるからです。私たちが主のことを知れば知るほど、すばらしいお方であることを知れば知るほど、主にあるその救いのすばらしさを知れば知るほど、その喜びをほかの人とも分かち合いたいと望むようになるのです。私たちのような罪に死んでいたどうしようもない者を救ってくださったその神様の力がほかの人のうちにも働いて、罪人が神様に立ち返ることを通して神様の栄光が現わされることを大いに期待して、恥じることなく福音を宣べ伝えようとするように変わっていくのです。ダビデは自分の主を愛していました。ですから、その主の住まわれる主の家をも愛していたのです。

でも、それだけが理由ではありませんでした。ほかにも理由があったのです。それは主の家には神様がおられるだけではなくて、ダビデ以外にも神様を愛する人々が集うからでした。だからこそ、その場所を彼も愛していたのです。ここで覚えて欲しいのは、対比がなされていることです。ダビデは神様に逆らう悪者の集まりというものを忌みきらっていて、そして逆に神様を愛する者の集まりを愛していたということです。ダビデは自分ひとりではなくて、兄弟姉妹とともに神様に感謝をささげて礼拝することを喜びとしていました。神様を同じように愛する者と一緒にいることを喜びとしていたのです。

これは私たちにとって何を意味するのでしょうか？今を生きる私たちにとって、同じ神様を愛する者の集まりを愛するというのは、教会を愛するということです。少し考えてみてください。はたして、私たちは今どれほど、自分にとって教会が、自分にとってほかの兄弟姉妹が、自分の歩みに必要不可欠な存在だと信じているのでしょうか？私たちがこうして日曜日に集うことも、兄弟姉妹が交わりをもつことも、それが私たちにとって必要だからです。私たちは日々の歩みの中で、色々な問題に直面し落ち込んでしまうことがあります。心が不安や恐れで疲れてしまうこともあります。でも兄弟姉妹が集えば、互いにみことばの真理をもって支え合い祈り合うことができるのです。私たちは日々の歩みの中で、罪の誘惑や葛藤を経験し、心がたかくなになってしまいそうになることがあります。みことばに示された道から逸れてしまいそうになることもあります。徐々に徐々に神様やみことばに従うことを妥協して、心から主への熱意や愛が薄れてしまう、そのような危険に遭うかもしれません。でも兄弟姉妹が集えば、その人の目を神様に向けて、忍耐を持って歩み続けるようにと互いに励まし合うことができるのです。ヘブル3：13で「「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」とされています。私たちがみことばをくり返し見るときに、私たちの歩みには、ほかの兄弟姉妹が必要不可欠なのだということを見て取ることができました。今年度、私たちは色々な場面でそのことを何度も考えましたが、私たちはひとりで信仰生活を送っていくのではなく、同じ神の家族とされた者たちと主を見上げ、支え合いながら歩いていくことができるのです。そしてそれが私たちにとって欠かせないものであり、そのような関係が与えられているというのは、ただ主の恵みだということです。もし、私たちが神様を愛する者として成長したいと願うのであれば、兄弟姉妹を愛する者として成長することです。兄弟姉妹を愛する者として成長したいと思うのであれば、神様を愛する者として成長し続けることです。どちらも欠かせないものになります。

ダビデは主の忌みきらわれることを忌みきらい、主の愛することを愛していました。彼は神様を心から愛していたからこそ、同じように主を愛する者をも愛していました。では、私たちはどうでしょう？

3. 確信に満ちた賛美をささげること 9-12節

そして最後三つ目に、不当な扱いを受ける中でダビデがふるまった最後三つ目のこと、それは「確信に満ちた賛美をささげること」でした。主の前を誠実に歩んでいたダビデはまず、9-11節のところでこのような祈りを主にささげています。9-11節見ていただくと、「:9 どうか私のたましいを罪人とともに、また、私のいのちを血を流す人々とともに、取り集めないでください。:10 彼らの両手には放らつがあり、彼らの右の手はわいろで満ちています。:11 しかし、私は、誠実に歩みます。」ダビデはここで自分自身と自分を責め立てている悪者とを一緒に扱わないでください、と主に願っていました。彼は、主に逆らう罪人がどのような行く末をたどっていくのかということをよくわかっていたのです。だからこそ、誠実に歩む自分が、彼らと同じようにさばかれないようにと祈っていました。だからこのように言うのです。「神様、あなたは聖いお方であるからこそ、人々を傷つけるような者やその手を悪に染めているような者を必ずさばかれます。彼らは私をおとしめようとしてきました。でも、私は変わらずにあなたの前を正しく歩んでいました。あなたもそれをご存じです。だからそんな者たちと私と一緒にしないでください。」そのようにダビデは願っていたのです。でも皆さん、ダビデは彼自身の正しさを誇りとしてこのようなことを主に願ったのでしょうか？もちろんそうではありません。だからこそ11節の後半部分

でダビデはこう言うのです。「どうか、私を贖い出し、私をあわれんでください。」と。ダビデは変わりませんでした。彼は自分の行いに希望を見出していたのではなく、彼はただ主のあわれみに依り頼んでいたのです。ダビデは自分のことをよくわかっていました。ダビデは、本来、自分と一緒にしないでくださいと願った敵と自分は同じ立場であることを覚えていました。自分も主の恵みが必要な罪人であるということを忘れてはいませんでした。だからこそ、主の前にへりくだって、主のあわれみのうちに自分の身をゆだねていたのです。

これは今の私たちにとっても同じです。私たちが主イエス・キリストによって救われたとき、それは決して、私たちの正しい行いによってではありませんでした。むしろ私たちは聖い完全な神様の基準を前にしたときに絶望を覚えたのです。自分には主の求めておられる基準など到底満たすことなどできないと。生まれながらに神に逆らっていた私たちは、当然、神の御怒りのみ値する存在でした。しかしその事実心砕かれた私たちは、神様に対する自分の愚かさや罪深さを認めて、主の前にへりくだって悔い改め、主のあわれみをただ求めてその前に出たのです。そしてそのように心砕かれて悔い改めた信仰をもって出てくる者を、主はただ恵みとあわれみによって罪を赦し、救いを与えてくださいました。救いは確かに私たちの行いではなく、ただ主の恵みによるものだったのです。エペソ2：8も私たちがよく知っている箇所の一つかと思います。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」と。救いは、私たちの行いではなく、主の恵みによるものでした。でも同時に、恵みによって救われた私たちは、その後は自分の力で歩いていくわけでもありませんでした。私たちは恵みによって救われ、恵みによって歩いて行くのです。

そしてそのようにして主の恵みとあわれみにいつも目を留めて歩み続けるなら、その人の心にはあるものが生じるようになるのです。あるもの…なんだと思います？ 12節はこう続いていました。見ると「私の足は平らな所に立っています。私は、数々の集まりの中で、【主】をほめたたえましょう。」主のあわれみを覚えて誠実に歩み続けていたダビデは、最後に言うのです。「私の足は平の所に立っています。」彼の周りを取り囲んでいた状況はひどいものでした。彼の心は苦しんでいたのです。でも、彼は言いました。「私の足は平な所に立っています。」と。言い換えれば、彼の歩みは、不当な扱いを受ける中であろうが、色々な困難に直面する中であろうが揺り動かされることなくしっかりと安定していた、というわけです。ダビデはこのように、自分のすべてをご覧になっておられ、あわれみを示してくださる主権者の御手のうちに、揺るがぬ確信を見出すことができました。その主のうちに平安や希望を覚えることができました。そしてその確信を見出すことができたからこそ、確信に満ちていたダビデは、自分でそれを満足して終わりではなく、人々と一緒になって主に賛美をささげていたのです。スポルジョンはこの箇所のダビデについて、こんなことばを残していました。「彼は皆にこう言っているかのようです。「私を野尻りたければそうしなさい。私を陥れたいなら好きにしなさい。神はあなたがたよりも遙か高くにおられるお方です。私はこの方にあって堅く立つのです。そして、神の御名に祝福され、敵が私を投げ倒そうとしても、私の足は平らな所に立ち、会衆の中で主を賛美するのです。」」（チャールズ・スポルジョン）これが、主の恵みを覚えて主のうちに確信を置いた者のとった行動でした。ダビデは、たとえ周りの者がありもしないことで自分を責め立てようとしても、神様が自分を守ってくださると信じていたのです。この方があわれみによって自分を助け出してくださる、という希望を見出していたからこそ、彼の足はふらつくことなく堅く立つことができたのです。そして、そのすばらしい主の姿を心に留めた彼は、その主に対する感謝を、ひとりではなく、ほかの人と一緒に分かち合っていました。

〇まとめ

今、この中に、色んな苦しみをかかえている方がおられるかもしれません。不当な扱いを受けて、言われのない非難で難しさを覚えている方もいるかもしれません。ダビデがその方に励ましとして、慰め

として教えてくれているのは、神様はあなたのことも忘れてはおられないということです。あなたも、神様の守りを祈り求めることができるということです。主の変わらない恵みを覚えることができるということです。そして何より、来たる日がやって来れば、すべてをご存じの主が正しい審判者として必ず報いてくださるのだと、そう信頼することができるということです。確かに私たちは無力です。でもこの主に信頼して、この方のうちに希望を見出して歩むことができるというわけです。そうだとすれば、もし、自分にはどうしようもできない、周りにも助けを見出すことができないような状況に陥ることがあったなら、はたして私たちはどのようにふるまおうとするのでしょうか？そんな状況にあって、どうそれに応答しようとするのでしょうか？ダビデはその中にあって、主の守りを祈り求めて、主の忌みきらいものを忌みきらい、愛するものを愛し、確信に満ちた賛美をささげて、主の前を誠実に歩み続けていました。自分の力により頼んでいたわけではありません。ただ自分の前に主の恵みを置いて、主の変わらないあわれみに信頼して真理の道を歩み続けていました。そしてそのように歩んだからこそ、ダビデの状況は確かに厳しいものではありましたが、彼の足は堅く立ち、揺るがされることはなかったというわけです。彼はその中にあって、同じように主を愛する者たちと一緒に感謝を分かち合い、賛美をささげることができました。この26篇を見たときに、1節の「【主】よ。私を弁護してください。」といった訴えから、最後26：12の一番最後で「【主】をほめたたえましょう。」という賛美へと、ダビデの心が変わっていったということです。主に信頼してすべてをゆだね、誠実に歩み続ける者は、主のうちにそのような喜びと希望を見出すことができました。今の私たちも、同じ主を見上げて歩いていくことができます。主に信頼してこの方の恵みとあわれみを覚えて、誠実に歩む者としてともに成長していきましょう。